英国におけるナイチンゲール伝説の形成
The Formation of the Nightingale Legend in England

松野　修

MATSUNO osamu

キーワード：ナイチンゲール，クリミア戦争，看護，衛生，道徳

Florence Nightingale has been famous in Japan since the Meiji Era. She was essentially the only non-Japanese woman accepted as an ethical model for the Japanese people. Even today, one can still find books about her lining the children's shelves at bookstores. Thus, an inspection of how the Nightingale legend was received in Japan may shed light on Modern Japan's national moral conscience. In this paper, I propose to lay the groundwork for such research through an exploration of the formation of the Nightingale legend in her native country.

はじめに　ナイチンゲール受容史研究の意義

第二次世界大戦前の日本においてフローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820-1910）は模範的な人物としてたいへん有名であった。それもそのはず，戦前の国定修身教科書でとりあげられた唯一の外国人女性はナイチンゲールその人だったからだ。ナイチンゲール以外にも戦前の国定修身教科書に頻繁に登場した人物はたくさんいたけれども，第二次世界大戦後，日本の国際的地位と人々の価値観が大きく変化したのに伴って多くの人物が顧みられなくなった。そうした中にあってナイチンゲールは現在もまだ依然として有名人であり続けている。それはつまりナイチンゲールが〈国家の教育政策の一環として上から押しつけられた道徳教材〉だっただけでなく，多くの日本人の価値観によって彼女の人物像が支えられていたからでもある。だとすればナイチンゲールがその時代においてどう語られてきたかを検証すれば，戦前・戦後を通じて日本人の道徳観を検証できる。

これまでも戦前の国定修身教科書に登場する人物の，神話と実像を比較する研究がなされてきた。その中でもナイチンゲールは特に魅力的な人物である。なるほど彼女は生前から偶像化され，国家や教師にとって都合のいい模範的な女性として持ち上げられてきた。けれども，彼女は既存の社会規範を体現していただけの人物ではなかった。ナイチンゲールは時代の新しい潮流に押し上げられながら，古い規範を破壊し，新しい規範を打ち建てる境界線上に立ち，そしてみごとにそれをやってのけた。じっさいナイチンゲールが社会に登場する前と後とでは，社会の規範が異なっている。

彼女がそれを変えたからだ。新しい規範を打ち建てる過程で，ナイチンゲールは道徳の破壊者とならざるをえなかった。修身のお手本どころではない。

しかしまだその続きがある。彼女が作った新しい規範が人々に支持され，それが既存の規範となっていく過程で，ナイチンゲールは道徳の守護者としての位置に立たざるをえない。そうしてさらにナイチンゲールが既存の規範の第一人者として標章化されるうちに，当初は鮮烈で新鮮だった人物像は輝きを失い，陳腐で形骸化した通俗道徳の体現者へと廃頽していく。その結果はナイチンゲール伝説の忘却だろうか。いやフローレンス・ナイチンゲールの神話を暴き，実像に迫ろうとした人たちは，彼女が現実に経験した深い葛藤を目のあたりにし，実像にたじろぎ，圧倒され，そうして〈ほんとうのナイチンゲール〉を再発見してきたのだった。一度ならず繰り返し〈ほんとうのナイチンゲール〉の発見がなされてきた。本編ではこの事実を検証する。こういうことがおこるのは，ナイチンゲールが新しい社会規範を作った人物だからであり，同時にナイチンゲールの作った規範が現在のわたしたちたちにとって既成の規範となっているからであり，さらに既成の規範の形骸化・道徳の通俗化がいつでもいたるところで起こるからである。

ふりかえって考えてみると，上記のような規範の変化過程はひとりナイチンゲールに限らず，もっと普遍的な性格を帯びている。既存の規範をいったん破壊し中断し，主体的な価値判断に基づいて改めて自己の行動規範を組み直すのは，道徳的意識形成における本源的な過程である。しかもその過程は一個人にとってもただの一度ではなく，何度も繰り返しなされなければならない。人は何度も自信を失って他人の評価の影に怯えつつ既存の秩序に過剰なほどに随い，そしてそれでも繰り返し自信を取り戻し，ほんとうの自分を新たに発見し，自らが選択する行動原理，つまり良心に随う。その意味でナイチンゲールという人物の神話化，偶像化と実像の再発見は道徳論にとって普遍的な課題を内包している。

第１章　記述分析のための標準的指標

ナイチンゲールに関する多くの伝記は概ね以下のような構成をとっている。

（a）クリミア戦争以前=（a-1）フローレンス・ナイチンゲールは英国の大地主の娘で，何不自由なく育ち，幼い時から慈悲深く，動物を看護したこともある。（a-2）長じてヨーロッパ各国の病院，慈善施設を訪問して見聞を深め，ドイツにある看護婦養成施設で研修した。（a-3）帰国後，ロンドンにある慈善施設の管理者としての地位に就いた。

（b）クリミア戦争での活躍=（ｂ-1）クリミア戦争開戦直後，英国陸軍は軍組織の不備ために前線で自滅寸前となり，その実状が本国に報道された。（ｂ-2）ナイチンゲールは陸軍大臣の要請を受け，看護団を組織して野戦病院へ出発した。（ｂ-3）〈ランプを掲げる天使〉に象徴される看護活動を展開し，兵士の健康回復に効果をあげた。（ｂ-4）過労のため罹患するが，快癒後も戦争終結まで野戦病院にとどまり，終戦後，盛大な歓迎を避けて隠密裏に帰国した。

（c）クリミア戦争後=(c-1)女王に拝謁を許され記念品を賜る。(c-2)国民からも多額の褒賞金が寄せられたが，これを私せず全額を看護婦学校設立の基金として拠出した。(c-3)これらの活動が国際

赤十字社事業のきっかけとなった。（c-4）看護，衛生関係の本を著したものの，公の席に出ることなく隠遁生活を送っている。

このうち日本の修身教科書に描かれたナイチンゲール像を特徴づけるうえで特に重要な要素は（b-2）と（b-3）の要素である。（b-2）の要素とは，言い換えれば〈なぜナイチンゲールが選ばれたのか〉という問いである。この時代の欧州には上流階級の女性が貧者病者を慰問する習慣があった。それは上流階級の男性が政治家としての労を自ら引き受けるのと平衡した貴婦人の務め（noblesse oblige）であり，裏を返せば自らの社会的地位を誇示する行為でもあった。フローレンス・ナイチンゲールも，たしかに若い時にこの種の貴婦人の務めを果たしている。しかしだとすれば,多くの貴婦人の候補者があった中で,なぜナイチンゲールだけが選ばれて戦場に向かったのか。日本で刊行された伝記はこの疑問に堪えられる記述になっているのかどうか。この点について後に検討する。

もうひとつ（b-3）の要素とは，ナイチンゲール看護団は野戦病院でどんな活動を行ったのかという問いである。クリミア戦争におけるナイチンゲールの活躍は英国国内では〈ランプを掲げた天使〉というイメージを伴って繰りかえし語られてきた。これに対して果たして日本の修身教科書に登場するナイチンゲール像には〈ランプを掲げた天使〉というイメージが伴っていたのかどうか。そしてそのうえで,〈ランプを掲げた天使〉が描かれていたとすれば，それはどのような文脈で語られていたのか。そもそもナイチンゲール看護団の使命が従来の〈貴婦人の訪問〉と質的に違っていたのなら，ナイチンゲールの活動は〈ランプを掲げた天使〉の巡回だけで終わらなかったはずである。だとすれば，ナイチンゲールが行った病院での看護は，具体的にはどんな活動だったと説明されるのか。そしてその活動にはどんな効果があったと評価されているのか。日本で刊行された伝記では，これらの件に関してどんな記述がなされているか。この点についても後に検討する。

日本で刊行された伝記をこの２点に焦点をあてて比較検討するに先だって， 1910 年以前つまりナイチンゲール存命中の英国国内では，上記の２点についてどのような説明がなされていたのか確認しておく。ナイチンゲールが選ばれた理由については 1854 年の新聞記事が,〈ランプを掲げた天使〉のイメージが誰によって作られたのかについてはクックの伝記が，そしてナイチンゲール看護団の実際に活動については 1855-57 年の英国政府報告書が答えている。

第２章　ナイチンゲール伝説（１）　〈貴婦人の訪問〉との違い

1854 年 10 月 30 日『タイムズ』は「ナイチンゲール夫人とは誰か？」と題する『エグゼミナー』誌の記事を転載し（『Times』1854 年 10 月 30 日），フローレス・ナイチンゲールの人となりを紹介した。これはナイチンゲールに関する世界で最初の記事であり，その後のナイチンゲール伝の原型ともなった。この記事は冒頭で，フローレンス・ナイチンゲールは上流階級の若い独身女性であること，当時の女性としては珍しく古典語，数学，科学についても造詣が深いこと，社交界での人間関係を通じて国内の有力者に多くの知己を持っていること，好都合なことに同盟国たるフランス語にも堪能であるなどが紹介される。しかし，それだけではナイチンゲールが看護団の団長として

選ばれた理由にはならない。この記事は，はっきりとこの疑問を提示している。

「ではなぜこれほどの方が，人生を輝かしめるに必要なものすべてに恵まれた方，憂いなく人生を送るための相当な資産をお持ちの方が，誰もが心から憧れているそういうものをむざむざ捨てようとされるのか？　どうしてまた，これらすべてを投げ打って，そんなものになろうとされているのか―看護婦がごときものに」。

ナイチンゲールが今般，看護団の責任者として選ばれた重要な根拠として挙げられているのは，ドイツの病院施設で数ヶ月にわたって看護法の研修を受けたこと，ロンドンにある慈善看護施設の経営再建を果たしたことの２点である。

「3 年前，全ヨーロッパが万国博覧会でわきかえっていた時，あるいはスコットランドの高原地方やスイスの湖沼地帯が，そしてまたヨーロッパ大陸の各地の名所が楽しい催しに満ちあふれていたとき，ナイチンゲール女史はドイツにあって堕落した者を救済し，世話し，訓練するための病院施設の壁の中に閉じこもっていた。何か月もの間，彼女はそこで昼夜を分かたず働きつづけ，女性が掌るべき職務としての看護や手業について，そのすべてを習得するための経験を積み重ねていた。彼女はその後再び自分の幸福な家族の元へと戻ってきたが，彼女の強い慈愛の念は自分のまわりの人びとだけに留まることがなかった。そして，じっさいよくある話なのだが，〈建前上は必要なものがすべて揃っているはずなのに，じっさいには誰もその人たちを救おうとしないことがら〉に目をむけたのだった。ロンドンに設立された病気の女性家庭教師のための病院が経営破綻の危機に陥ったとき，彼女は進んで援助を申し出，その施設の監督者に就任することに同意した。美しいダービーシャーとハンプシャーの屋敷はハーリー街にある狭く憂鬱な施設と交換された。彼女はそこに自分の持てるすべての時間と富とをつぎ込んだ。彼女の友人たちはロンドンの社交シーズンに各所で開催される舞踏会，講座，音楽会，展覧会などなど，そのほかいろんな娯楽の催しにナイチンゲール女史が姿を見せていないことに気がついた。彼女はそうした催しでの楽しみを賞味するだけのじゅうぶんな能力を備えているにもかかわらず，ベッドの側にいて憐れな，寄る辺なき，不平の多い，臨終の女家庭教師たちの繰り言を聞き，慰めていたのだった」。

〈建前上は必要なものがすべて揃っているはずなのに，じっさいには誰もその人たちを救おうとしないことがら〉とは，ロンドンのハーリー街にあった病院患者だけでなく，クリミア駐在の英国軍兵士のことをも指しているのは明らかである。ドイツで看護婦としての専門的な研修を受け，さらにハーリー街の病院施設を立て直したナイチンゲールには，兵士の看護だけでなく，混乱が続く野戦病院を管理運営する能力が備わっているという説明である。これだけでもナイチンゲールが抜擢された理由は明かである。しかもこの記事は重ねて，たんなる貴婦人の慰問や，経験も能力も伴わない未熟な熱情だけでは成果があがらないどころか現地のお荷物になりかねないとも説く。

「陸軍にいる傷ついたわれらの同胞たちから苦痛の声があがり，東洋から本国へと，たんなる病院での治療以上のさらなる援助を求める痛切な訴えが伝えられたとき，すぐさまこの求めに応じようとの熱情溢れる答えが各所から返ってきた。しかし未熟な熱情だけでは成果はあがらない。適切に組織されていない看護婦の群れは好結果どころか，むしろ厄をもたらすだろう。高貴な衝動とい

えども，それを指揮するための頭脳と手と心とを欠いていれば結局は失敗に終わりかねない。ところがこの任務はナイチンゲール女史にとって，まさにこのために練習を重ねてきたようなものではないか。彼女の持ち前の同情心，これまで培ってきた経験，指示命令する能力は，まさにそのためのものだ」。

ナイチンゲールのこれまでの経歴は従来の〈上品な貴婦人の訪問〉とはまったく次元の異なる，戦場での救護活動を期待できるものだった。記事はさらに踏み込んで，野戦病院への女性看護団の派遣については反対の声があることも認めている。そのうえで，ナイチンゲールが看護団の責任者としての任務を引き受けた行為そのものを，すでに高貴で純粋な英雄的行為として讃美した。

「賢人ぶった人の中にはこの熱情を非難したり，嘲笑したりする者もいるだろう。〈そんな常軌を逸した行いを，場所がらをわきまえない行いを〉と，蔑み憐れんで見る者もいるだろう。しかしこの国の誠意ある人なら，国外にいる者にこう言うだろう。そして国内の人びともじっさいこう感じているにちがいない。英国でこれほどまでに誇らしい，心清らかな娘がいるだろうか。今この時点で，これほどに期待の頂点に立っている者がいるだろうか。フローレンス・ナイチンゲールより以上に」。

この記事が掲載されるまでの経緯を整理しておく（以下，特に断らない限り E.クック，第 1 巻，邦訳による）。1854 年 3 月 28 日，英仏がトルコと同盟してロシアに宣戦布告して，クリミア戦争が始まった。10 月 9 日『タイムズ』は，英国軍の看護体制の不備を指摘したラッセル記者（Russell, William Howard）からの第 1 報を載せる。10 月，ケネリー（Chenery）が『タイムズ』にスクタリにおける野戦病院の実状を伝える。「負傷者の手当のための十分な準備がなかったことを聞いたら大衆はどんなにか驚き怒るだろう。……イギリス軍がかの地に入ってすでに六カ月たっているというのに，最もありふれた外科手術の下準備さえできていない有様なのだ！」（邦訳 201 ページ，Shepherd，p.146）。10 月 13 日，フランス軍と比較して英国軍の看護体制の不備を指摘したケネリーの続報が『タイムズ』に載る（邦訳,p.201，Shepherd,p.146）。これを受けて 10 月 14 日，ナイチンゲールからシドニー・ハバードへ「看護婦として戦地に派遣してほしい」との要請の手紙が送られる。同日『タイムズ』には「看護婦を現地に送れ」との投書が載る。翌 10 月 15 日シドニー・ハバードからナイチンゲールへ看護団団長就任要請の手紙が届く。3 日後の 10 月 18 日，シドニー・ハバードは戦時大臣として，ナイチンゲールを「トルコ領における英国陸軍病院の女性看護要員の総監督」に任命した。10 月 19 日『タイムズ』がフローレンス・ナイチンゲールの人となりについて初めて報道。10 月 28 日には『エグゼミナー』はナイチンゲールの経歴を詳しく報道，30 日『タイムズ』にも転載された。これらの一連の報道を読んでいた者にとって，野戦病院への女性看護団の派遣が前代未聞の事件だったことは明白だった。シドニー・ハバードからナイチンゲールへ宛てた手紙やシドニー・ハバードの任命書も 1900 年代の英国で出版された伝記に採録され（たとえばShara A. Tooley, The Life of Florence Nightingale, 1905），この記事は日本にも伝わっている。

ナイチンゲールが抜擢された理由はわかった。しかし翻って，この時点よりも前に，そもそも裕福な家庭に生まれ育った貴婦人が安楽な生活を自ら放擲してまで，なぜドイツで研修を受けねばな

らなかったのか。リーハーストとエンブリーを捨てて，みすぼらしいロンドンの看護施設の経営をしなくてはならなかったのか。〈ノーブレス・オブリージュ〉というにはあまりに常軌を逸しているのではないか。要するになぜ年若いナイチンゲールは多難な看護活動に飛び込んでいったのか。この点については依然として謎のままだった。そのため『エグゼミナー』と『タイムズ』の記事では，「彼女は小さい時から同類の者に対する優しい思いやりの気持ちの強い人だった。弱い者，虐げられた者，見捨てられた者，苦しんでいる者，不幸な者に対する同情心が人一倍強かった。リーハーストやエンブリー周辺の子どもや貧民は，彼女のそうした姿を最初に目にした人たちだった。彼女はあるときは彼等の訪問者として，あるときは先生として，慰問者として，宣教師として現れた」と，ごくあいまいに幼少時代を描いて見せるほかなかった。ところが日本の修身教科書では，この幼少時の行動が奇妙なまでに拡大して伝えられてしまう。その点については後に詳しく検討する。

第２章　ナイチンゲール伝説（２）　ランプを掲げる天使

〈ランプを掲げた天使〉のイメージは誰のどんな発言を元に作られたのかについては，クックの『ナイチンゲール伝』に中に解答がある。野戦病院におけるナイチンゲールの活動がいつ誰によって伝えられたのか，クックの記述を整理しておこう。

1854 年 11 月 3 日，ナイチンゲール看護団 38 人は黒海南岸に設けられたスクタリの野戦病院に到着。5 日，クリミア半島南部にあるインケルマンで大規模な戦闘があった。6 日，インケルマン付近のバラクラバ港からの傷病兵がスクタリへ到着しはじめる。14 日，クリミア半島を猛烈な台風が襲い，クリミア半島に停泊中の艦船が壊滅。この日から本格的な冬を迎えた。12 月 14 日，メアリ・スタンリーが 46 人の看護婦を伴ってスクタリへ。ナイチンゲールにはこの第２隊におけるカトリック系看護婦の指揮権が委ねられなかったので，以後宗派間の葛藤を抱えることになった。

11 月，ラッセルは『タイムズ』に以下の記事を送る。「雨はあいかわらず降り注いでいる。空はインクのように黒く，風は震えるテントの上を荒れ狂っている。塹壕は水路に変わり，テントの中でさえ踝の深さまで水がたまっているところがある。兵士たちは冬用の衣服も防水布も持っていない。彼らは 12 時間ぶっとおしで戸外の塹壕の中にいる。……人びとはいずれ知るにいたるだろう。雨のロンドン市街をあてもなくうろつき歩いている乞食ですら，国のために闘っている英国の兵士比べれば，王侯貴族のような暮らしをしていたのだと」（Russell,p.151）。

1855 年 1 月，ラッセルは『タイムズ』に英国陸軍の死亡率について以下の記事を送る。「わが軍では連日のように，24 時間以内に 100 人近い兵士が軍務から脱落しつつある。第 63 連隊では［1 月］7 日に 7 人しか軍務に就いていない。同日第 46 連隊でも軍務に就いているのは 30 人だけである。第 90 連隊に属するある精鋭の大隊では数週間にわたる厳しい任務のため，ここ数日間のうちに 24 人にまで減少し，2 週間のうちに 15 人が死亡した。スコットランド・フリュージア近衛連隊には当初 1562 人が配属されていたが，行進の点呼に応じたのは 210 人だけだった。約 7000-8000 人の兵士が病気，負傷，健康回復のために，同一期間にボスフォラスの病院に入院中である」（Russell,p.157）。

こうした困難な状況下でナイチンゲール看護団の活動が展開された。戦地から手紙や帰国した兵士たちの噂を通じて，1855 年 2 月にはナイチンゲールの神話化はすでに始まっていたと言われている(Shepherd, p.283)。そうした中で 1855 年 3 月 12 日，クリミアにおける医務局総監ジョン・ホールは陸軍医務局総監 A.スミス宛てにナイチンゲールを誹謗する手紙を書いていた。この手紙は後述する『王認委員会報告』，付録 74，No.138 に収められ，その時点で公になった。「わたしが聞いた限りでは，フランスの軍の総合病院がわが軍の総合病院より優れているとはとうてい信じがたいことであります。……にもかかわらず，わが軍の組織には実にさまざまな誹謗中傷が投げつけられてきました。自分が道義的評価を失ったばっかりに，なんとかそれを取り戻そうとする連中や，自分らの使命をさも重大そうに見せようとする連中は，『わが軍の組織が改善されたのは，すべて自分たちのおかげだ』とか，『幾人かの看護婦のおかげだ』などと世間に信じ込ませようとしているのです」（Report 1857-1858）。

ナイチンゲール看護団の派遣には，陸軍の不備を厳しく追求する世論をかわそうとする意図があった。1855 年 11 月 29 日，ナイチンゲールがまだ戦地に留まっていた時，「ナイチンゲールの奉仕に対して感謝の気持ちを表明するための公的な会合」がロンドンで開催された。これも世論対策の一環といえる。この席でシドニー・ハバードは戦地から自分宛に送られた，次の兵士の手紙 2 本を朗読した。「彼女が通り過ぎる姿を見るだけで，ぼくらの心は慰められました。こちらの患者に言葉をかけ，あたりの何人かにうなずき，少し離れたベッドの患者に微笑を送り―もちろん，すべての者に言葉をかけるわけにはいきません。何百人もの患者がいたのですから。しかしぼくらは通りすぎる彼女の影にキスをし，満足してふたたび枕に頭を乗せるのでした」。「ミス・ナイティンゲールがこられるまで病院には罵言，悪態が絶えませんでしたが，それからというもの，病室には教会の中のように聖らかな空気がみなぎるようになりました」（邦訳, p.315）。

1856 年 3 月 30 日，クリミア戦争終結。かつてメアリ・スタンリーと共に戦地へ向かった第 2 次看護団の一員ファニー・M. テイラーは 1856 年に，当時の活動を描いた記録を公刊した。その中で著者は次のようにナイチンゲールを描いた。「三階を巡回して多くの病室を廻り，廊下に並べられたベッドの間を歩きました。総婦長のあとについてえんえんと歩いたのでしたが，それは容易に忘れられぬ経験でした。ゆっくり進む私たちのまわりはしんとしていて，苦しんでいるはずの兵士たちも，めったに呻き声をあげませんでした。ここかしこに，ぼんやりと明かりがともっていました。ミス・ナイティンゲールはランターンを手にしていました。患者のベッドの上に身を屈める前に，彼女はそれをそっと下に措きました。患者に対するその物腰といったら―何とも言えないほどやさしく，愛情に満ちているのでした」（邦訳, pp.315-315）。ファニー・M. テイラーは職業的な看護婦ではなく，フローレンス・ナイチンゲールやメアリ・スタンリーとおなじく無給の貴婦人ボランティアだった。

1856 年 5 月 5 日，エルズミア卿（Lord Ellesmere）は平和条約締結に関する動議を議会に提出。この演説の中で，タイムズ基金の責任者マクドナルドによる記事を朗読した。マクドナルドによるこの記事はナイチンゲール神話の核心をなす部分である。

「症状が危険的な形を取り，死の手が間近に迫っている重傷者の枕頭には必ずといっていいくらい，彼女の姿が見られた。その静かな存在は，瀕死の苦悶のうちにある患者を力づけ，慰めた。彼女はここの諸病院では掛け値なしに〈病者に仕える天使〉であり，そのたおやかな姿が廊下を進むとき，苦しみにやつれた傷病兵の顔は感謝の思いにふと和むのだった。軍医たちが一人残らず自室に引き取り，静寂と暗黒が患者たちのベッドを包むとき，彼女は小さなランプを片手に病室から病室へと一人巡回を続けた」（邦訳 315 ページ）。

マクドナルド（Macdonald）のこの記事をもとに，米国の詩人ロングフェローは「見よ，悲惨のきわみのとき／ランプを手に歩む女性の姿あり」の一節を含む詩を創作した。タイムズ基金とは，英国軍の窮状を訴えた『タイムズ』新聞の経営者が民間に寄付を募り，マクドナルドを現地に派遣して軍隊に必要な物資の援助に充てたものである。運用にあたってはナイチンゲールの指示に全面的に従った。陸軍責任者からすれば，マクドナルドは〈世論を背に軍の規律にくちばしを突っ込み，秩序を混乱させる厄介者〉だった。

1856 年 7 月 28 日，ナイチンゲールは隠密裏にコンスタンチンノープルを出発，8 月ロンドンに帰着。1857 年，ピンコッフ（P. Pincoffs）はスクタリの病院での見聞を公刊。ナイチンゲールの様子を次のように描いた。「重傷の患者は必ずといっていいくらい，ミス・ナイテインゲールの注意を引いたようでした。ほんの一時間前に入院したばかりの，誰も気づかなかった患者のベッドのかたわらに彼女が立っているのを見て，びっくりすることがしばしばでした」（邦訳, p.314）。ピンコッフは英国陸軍軍医ではなく，民間のボランティアとしてスクタリに渡った医師。このほかクックは出版時期が不明なクリミアの兵士たちの回想録からも，野戦病院でのナイチンゲールの様子を引用している。（邦訳第 1 巻 314 ページ，邦訳第 3 巻 438 ページ）。

1880 年，キングレークはクリミア戦争の記録『クリミア侵攻』全 9 巻を公刊。第 5 巻『冬の災難』のなかでナイチンゲールのことを次のように描いた。「兵士たちにおよぼした彼女の力には，一種魔力に似た感じがあったといえる。血で汚れた，悲惨な手術室においてさえ，その力は感じられた。片手，片足を失うことになる兵士は，当初は手術を受けるよりは死んだ方がましだと思ったかもしれない。しかしきっと唇を結び，手を組んでかたわらに静かにたたずむ総婦長の姿に気づき，むずかしい手術に立ち会うという苦痛を忍んで毅然と立つ彼女の姿を見るとき,『耐え抜いてくださいね』という彼女の声なき命令に従おうという気持ちをふるい起こし，彼女の存在に不思議な支えを見出して，雄々しく耐えるのだった」（邦訳, p.317）。キングレークは第 5 巻『冬の災難』で，1854 年冬に起こった悲劇の原因は総司令部の責任にあるとしている（Kinglake,vol.5,1880）。

要するにナイチンゲール神話の元になった資料は，現地の兵士からの手紙を除けば，民間人医師，民間篤志看護者，報道機関の設けた基金責任者らの発言からなっている。そしてそれらの記事や発言がナイチンゲールを戦地に送った責任者らによって引用され，宣伝されたのだった。しかしだからといって，これらの発言は実態に即していないなどと結論するつもりはない。

ナイチンゲール自身がどんな気持ちで戦場での看護にあたっていたのか，少なくとも兵士たちに対してどんな気持ちで接していたのかを窺わせる資料がここにある。戦地から帰ったナイチンゲー

ルは，野戦病院での経験をまとめて陸軍大臣に報告している。そこには戦場での看護活動以外のさまざまなことが書き込まれているが，その中には自身の思いを率直に吐きだした箇所がいくつかある。

「こんな話はいかにも野蛮で吐き気を催す人がいるかもしれない。しかしわたしは恐ろしいあの病院の中にあって，衛生兵や患者たちが見せた生まれ持った優しさ，すすんで人の世話をしようとする気持ちを想い出すにつけ，深く頭のさがる思いがする。あの人たちは，わたしのためにあんな仕事をしてくれたのだ。規則のためでもなければ，自分たちの健康のためでもなかった（彼らは，自分たちの生命と関わりがあるなどとは知らなかったのだ)。紳士なら決して使わないようなことばや目つきをするような人は，だれ一人いなかった。あの人たちのあの敬虔な態度を思うと，わたしの目には涙があふれてくる」(Nightingale, 1858,p.93)。

「その人たちの中で不平を言う者はだれ一人いなかった。あの苦難に戻るのをいやがる素振りを見せる者もいなかった。『祖国が勝利をおさめるまでは』。わたしはそういう人たちを何週間も何か月も見てきた。わたしは彼らの持続的な勇気，変わらぬ忍耐，素朴な人柄，気品高く苦難に耐える強さ，そしてあの静けさを見つづけてきた。あの人たちのあの姿はわたしの心に焼き付いて，忘れようとしても忘れられない」(Nightingale,1858,p.504)。

この報告書はごく少数印刷されただけで，彼女はこれが公の目にふれることを想定していなかったことを付言しておく。こうした資料を読めば，当時の人びとが彼女を心から慕い，敬愛した理由が理解できる。

第３章　ナイチンゲール伝説（3）　死亡率の劇的な低下

第１節　ルーバック委員会

クリミア戦争における英国陸軍の被害は，1854 年冬から翌年春までに集中していた。しかもそれは大規模な戦闘のためではなく，陸軍におけるロジスティクの不備が原因だった。このことは新聞報道を通じて戦争中から国民に広く知れ渡っていた。翌 1855 年春から 1856 年 3 月戦争終結までの期間には大規模な戦闘があったにもかかわらず，打ってかわったように状況が改善され，兵士の死亡率は急速に減少した。このためクリミア戦争後，英国国内では〈1854 年の冬，陸軍に多大な被害をもたらした責任者は誰か〉という犯人捜しと，〈その後の急速な改善に寄与した者は誰か〉という功名争いがおこった。クリミア帰還後のナイチンゲールも好むと好まざるとに関わらずこの〈犯人捜し〉に巻き込まれた。ここでは，ナイチンゲール神話を構成する（ｂ-2）野戦病院での看護活動の効果の如何について検討する。

1855 年 1 月，ジョン・アーサー・ルーバック（Reobuck, John Arther: 1801-1879）は世論の批判をうけて，議会下院に委員会を設けるよう提案した。その正式名称は「セバストポール前線の状況と，軍需物資についての責任者の措置を調査する委員会」，一般には「セバストポール委員会」とも，議長の名前をとって「ルーバック委員会」とも呼ばれる。この委員会はその名のとおり，政府の責任を追求するための委員会だった。委員長は野党議員ルーバックが務め，1855 年 3 月から審

議が開始された。その間も戦争は継続中だったので現地の責任者が呼び出されることはなかったが，軍務大臣ニューカッスル，戦時大臣シドニー・ハバード，陸軍医務局長アンドリュー・スミスらが証人として呼び出された。この委員会は公開されていたので審議のようすは新聞でイギリス全土に報道された。ルーバック委員会での審議がすすむにつれて，陸軍への非難は将校の売官制へ，さらには貴族支配そのものへと向かっていった。イギリスの歴史家ブリッグスは『ヴィクトリア朝の人びと』の第３章を「ジョン・アーサー・ローバックとクリミア戦争」に充て，この委員会について，「陸軍内部の昇級を金で買いとる制度に猛烈な非難が浴びせられた。その激しさはたいへんなもので，もしも戦争が続いていたら，［将校の売官制を廃止した］1871 年の改革は，［クリミア戦争がおわった直後の］1855 年か 1856 年に実施されていただろう」と書いている（ブリッグス, p.101）。

ルーバック委員会最終報告書には 1855 年 6 月 18 日に提出された。そこには「1854 年-1855 年の冬にかけて，軍が多大な被害を被ったのは軍司令部，とくに陸軍医務局が適切な措置をとらなかったためである」とされており，在クリミア陸軍医務局総監ジョン・ホールと，スクタリ病院の責任者メンジース主任軍医を名指しで非難した（Fifth Report,1885,p.20）。ただしルーバック委員会報告書がどれだけ正確に事実をつかんでいたかは疑問なしとしない。陸軍の被害の責任者をめぐっては『だれが絞首刑台に送られるべきか』などと題されたセンセーショナルなパンフレットも出回っていたほどで（ブリッグス，p.100），世論の怒りを鎮めるために，だれかを悪役にしたてて責任をなすりつけようと策動した者もいたことだろう。そのため陸軍の中で比較的立場の弱かった医務局が犠牲の羊にされたという見方もできる（Cantlie,1974,p.114. Cantlie は英国陸軍医務局長）。この報告書はまた，ナイチンゲールとタイムズ基金は大いに功績があったとしている。「本委員会は報告を終えるにあたって次のことを指摘しておきたい。スクタリの病院の恐るべき状態を実質的に最初に救ったのは，個人的な助言，努力，献身であった。ミス・ナイチンゲールは戦時大臣の助言によって看護団を組織し，患者の看護にあたり，めざましい貢献をした。一般の寄付による基金は『タイムズ』紙の経営者によって創設され，聡明かつ熱心なその代理人たるマクドナルド氏によって管理運営された」（Fifth Report,1855,p.22）。

第２節　衛生委員会の任命

結論はどうであれ，議会内に委員会が設置されたということ自体が大きな成果を生みだした。パーマストン新内閣が発足するとすぐに 2 つの政府委員会が戦地に派遣された。「衛生委員会」と「マクニール＝タロック委員会」がそれである。両委員会はルーバック委員会の審議がはじまる直前，すなわち 1855 年 2 月 22 日から 23 日に現地に向った。政府は議会の追究に備えて急いで手を打ったのだ。そして両委員会は政府の期待に応えて，まちがいなく事態を改善に導いた。

衛生委員会は新任の軍務大臣パンミュアによって 1855 年 2 月 19 日に任命された。衛生委員会は陸軍の医務局とは関係がなかった。関係がないどころか「医務局と関係をもってはならない」という趣旨の指示が出されている。3 人の委員ジョン・サザーランド（Sutherland, John: 1808-1891），ロバート・ローリンソン（Rawlinson, Robert: 1810-1898），ヘクター・ギャビン（Gavin）は軍医

ではなく，いずれもリバプール市の衛生監督官だった。大臣からこの委員会にあてた指令書には，「いかなるばあいにも，患者への投薬や手術など，治療についての事項にはいっさい干渉してはならない」とある（Sanitary Commission,1857,p.1）。さらに指令書には「コンスタンチノープル，および［クリミア半島の補給基地］バラクラバに到着したら，ただちに［コンスタンチノープルの］ウィリアム・ポーレット軍司令官，［海軍総司令官］グレイ提督，ラグラン陸軍総司令官と連絡をとられたい」と書かれていて，「軍医務局と連絡をとるように」とは書かれていない。事実，衛生委員会は現地で勧告書を提出したが，それは軍医をとびこして軍の司令官に直接に手交されたのである。

委員長サザーランドは後になって，「われわれは患者の治療や病室の規則に干渉しないように申し渡されていた。またひとりひとりの兵士の健康についても，いかなる権限ももたされていなかった。言いかえれば，患者ひとりひとりではなく病院全体を扱うように，軍の部隊ではなく軍隊が野営している場所を扱うよう指示された」と証言している（Sanitary Commission,p.5）。このように衛生委員会は軍医務局から独立した，まったく別の組織として作られたのだった。

第３節　衛生委員会の活躍

衛生委員会は軍務大臣から命令をうけてから３日後に現地に向けて出発した。スクタリの兵舎病院に到着してすぐ，サザーランドの目に映った病院はひと息れと悪臭と汚物にまみれていた。そのようすを『衛生委員会報告書』は次のように書いている。

「兵舎病院に足を踏み入れたとき，いちばんはじめに気がついたのは劣悪な換気だった。病院の空気を入れ換える装置はなにもない。ただ，あちこちに隙間があるだけだ。病室にある窓の上端から天井までかなり広い空間があったが，空気の逃げ道がなかったので，そこにはいつも生暖かい悪臭が漂っていた。病室にはストーブが入れられていた。このストーブの煙突は天井近くの小さな穴まで導かれていて，煙はそこから戸外に出ていった。しかし室内の換気はまったくなされていなかった。

便所にいたっては，もはや殺人的ともいうべき状態である。病室内に便器が置かれており，それが部屋じゅうに悪臭を撒き散らしていた。病院の四隅には建物の内側の各所に便所が設けられていた。この便所からあふれた汚物は廊下にまで浸みだし，空気の汚れをさらにひどくしていた。われわれが見たところ，兵舎病院に設置されたトルコ式の下水施設はまったく機能していなかった」（Sanitary Commission,p.12）。

フランスで公衆衛生を学んだサザーランドは医師や医薬品の不足など，新聞で報道されていた医務局の欠陥には目もくれず，病院内外のミアスマをとり除くために全勢力を傾注した。建物の下を通っていた排水溝を掘りかえして掃除させた。便所の汚物溜めの中身をぜんぶ捨てさせ，消毒し，埋めもどした。便所の上方にフラッシング・タンクを作った。このタンクに水をいっぱいため，水圧をかけて屎尿をいっきに海まで放出した。そのようすは『報告書』にくわしく書かれている。

衛生委員会は，３月いっぱいスクタリに滞在し，その間に応急の措置を矢つぎばやに指示した。委員は必要な指示を与えるとすぐにクリミア半島に出発したが，その後もスクタリには現場監督が

張りついて精力的に仕事をつづけたのだった。現場監督はそのときの詳細な日報を残している（Sanitary Commission ,p.47）。

衛生委員会の成果は明白だった。サザーランドはスクタリでの活動を次のようにまとめている。

「委員会の指示によって衛生状態が改善されるにしたがって，どの病院でも兵士の健康状態はめざましくよくなった。なるほどその成果の一部は『この時期にクリミアからスクタリに送られてきた患者の病状が軽くなったからだ』といえるかもしれない。しかし衛生環境を改善したときには，どの病院でも兵士の健康状態が好転した。これは疑いようのない事実である。われわれは衛生状態を改善するために，病院の周辺を清掃し，消毒し，洗浄した。下水溝と排水溝を修繕し，フラッシングを施した。患者が寝かされていた病室も回廊も石灰で洗浄した。患者の過密を解消し，換気も改善した。

サザーランドは委員会の成果を誇るように，彼らが到着した直後の 1855 年 3 月と，それから 4 か月たったあとの入院患者数を表にして見せている（Sanitary Commission,p.48）。わずか 4 か月の間に入院患者の数は 1/3 に減少した。

『衛生委員会報告』を長々と引用した理由はほかでもない。「野戦病院における死亡率の劇的な低下はナイチンゲール看護団の功績だった」という神話は，後に〈クリミアの同志〉となったサザーランドですらまったく想定外の言説だったことを確認するためである。ナイチンゲール看護団がスクタリ野戦病院における兵士の死亡率低下にいささかも寄与しなかったこと，そしてそのことが戦後のナイチンゲールにとって良心の呵責となり，英国陸軍の衛生改革のために後の人生の全てを投げ打つに至った経緯については，ヒュー・スモール（2003）が詳細に描いている。

翌 1856 年，かつての在クリミア医務局総監，ジョン・ホールは『〈機密〉先のトルコ戦争中に陸軍医務局が遭遇した困難についての見解』を作成し提出した。そこには，医務局当局者の眼からみたナイチンゲール看護団に対する次のような評価が記されている。「1854 年 11 月，スクタリの病院に物資やベテランの介護員が不足していたとき，献身的な貴婦人と有給の看護婦の一団が到着した。当時，彼らの献身は人びとから大いに称賛されたものだが，それはまったく正当な評価であった。ただ私は悪口を言うつもりはないが，敢えてこのことを言わせてもらいたい。彼らの仕事ぶりがイギリス本土で空想じみた熱狂をもって褒め称えられていたとき，その場にいた民間・陸軍の医師の働きについては誰も見向きもしなかった。……［1854 年］11 月，ミス・ナイチンゲールが 38 人の看護婦を率いてスクタリにやってきたときのことを冷静に考えてみよう。この時，そこに入院していた患者は 3200 人だった。したがって 1 人の看護婦が世話なり管理なり―まあどんな言葉でもかまわないが―を担当したのは看護婦 1 人あたり 84 人の傷病者だったことになる。医療関係者なら，この数字を見て，看護婦がそれぞれの患者に対してどれほどのことをしてやれたか察しがつくだろう」（Hall,1856,p.68）。

看護団がもたらした成果についての，ジョン・ホールのこの指摘は正鵠を得ている。

【文献一覧】

Tyer, Fany, *Eastern Hospitals and English Nurses: The Narrative of Twelve Months' Experience in the Hospitals of Koulari and Scutali, By a Lady Volluntieer*, 2 vols, 1856.

Hall, Sir John, CONFIDENTIAL: *Observation on the Difficulties experienced by the Medical Department of the Army, during the late War in Turkey, by Sir John Hall, M.D., K.C.B., Principal Medical Officer of that Army*, 1856.

Pincoffs, Perer, *Experience of a Civilian in Eastern Military Hospitals, by Perer Pincoffs, M. D. , late Civilian Physician to the Scutari Hospitals*, William & Norgate, 1857.

Fifth Report1855:*Fifth Report from the Select Committee on the Army before Sebastopol; with the Proceeding of the Committee, and an Appendix*,1855.

Sanitary Commission, 1857: *The Sanitary Commission, Report to the Right Hon. Load Panmure, G.C.B., Etc., Minister at War , of the Proceedings of the Sanitary Commission Dispatched to the Seat of War in the East, 1855-56*, Presented to both Houses of Parliament by command of Her Majesty, March 1857.

Report1857-1858:*Report of the Commission appointed to inquire into Regulations affecting the Sanitary Condition of the Army, the Organization of Military Hospitals, and the Treatment of the Sick and Wounded; with Evidence and Appendix*, Blue Book, 1857-1858.

Nightingale, Florence, *Note on matters affecting the Health, Efficiency, and Hospital Administration of the British Army, founded chiefly on the Experience of the late War. Presented by request to the Secretary of State for War, London*, Harison & sons. 1858 .

Kinglake, A. W., *The Invasion of the Crimea*, 9vols., Edinburgh and London, 1883.

Cook, Sir Edward , *The Life of Florence Nightingale*, London, 1913.

Russell, John William, Edited with an Introduction by Bentley, Nicolas, *Russell's Despatches from the Crimea 1854-1856*, New York,1967.

Cantlie, Neil , *A History of Army Medical Department* ,Edingburg, 1974.

Shepherd, John, *The Crimean Doctors*, Liverpool, 1991.

E.クック著，中村妙子・友枝久美子訳『ナイティンゲール　その生涯と思想』全 3 巻，時空出版刊，1993 年。

ブリッグス著，村岡健次・河村貞枝訳『ヴィクトリア朝の人びと』ミネルヴァ書房刊，1988 年。

ヒュー・スモール著，田中京子訳『ナイチンゲール　神話と真実』みすず書房刊，2003 年。